

Press
release

プレスリリース

国立工芸館

National Crafts Museum



LUCIE

RIE®

ルーシー・リー展

東 西 を つ な ぐ
優 美 の う つ わ

移 転 開 館 5 周 年 記 念

Elegant Vessels Fusing East and West —In commemoration of the fifth anniversary of the museum's relocation

ルーシー・リー《ブロンズ軸花器》1980年頃 井内コレクション(国立工芸館寄託) 撮影:品野 晃

記者発表会・内見会

一般公開に先駆けて報道関係の皆さまのみの発表会、および内見会を行います。

日時:9月8日(月) 午前11時30分～午後1時(受付開始 午前11時30分)

記者発表:午前11時50分～午後0時30分

参加ご希望の方は、下記のメールアドレスまたはFAXよりご所属・お名前・参加人数を記入の上、ご連絡ください。

報道関係の方のお問い合わせ先:国立工芸館 広報事務局(株式会社OHANA内)

Tel:03-6869-7881 Fax:03-6869-7801 E-mail:ncm@ohanapr.co.jp

ルーシー・リー展

東西をつなぐ
優美のうつわ

移転開館5周年記念

本展は、20世紀を代表するイギリスの陶芸家ルーシー・リー(1902-1995)の作品を国立工芸館に寄託された井内コレクションを中心に紹介します。

オーストリア・ウィーンで生まれたルーシー・リーは、ウィーン工芸美術学校で^{ろくろ}轆轤に出会い魅了され、陶芸の道へと進みます。作家としての地位を確立しな

がらも、1938年に亡命を余儀なくされると、作陶の場をイギリス・ロンドンへ移します。ウィーン、ロンドン、当時の美術のエッセンスを吸収し昇華した彼女の作品の魅力。それは、しなやかながらも芯を感じる優美な形、色彩、といえるでしょう。

私たちを魅了してやまないリーの作品、その造形の源泉は何であったのか。本展では彼女が出会った人、もの、場所、そして時代背景を交えながらその作品を紐解きます。ウィーンで出会ったヨーゼフ・ホフマンやロンドン時代のバーナード・リーチ、ハンス・コパー。制作初期から円熟期まで、彼女と交流のあった作家たちの作品もあわせて展示することで、その造形の根源へと迫ります。

また、これまでリーチとの関わりの中で捉えられてきた日本を中心とした東洋のやきものとの関係性も見直します。東洋のやきものへの関心が高まっていた20世紀初頭、リーチを筆頭にイギリスの作家たちは日本や中国のやきものに大きな影響を受け制作していました。その中心地となり土壌が形成されたイギリスで、彼女が、何をみて学び、受け入れたのか。洗練された佇まいの作品の内にある東西をまたぐ複層的な造形を知ること、作品に表された彼女の信念と凛とした姿が浮かび上がることとなるでしょう。

1章 ウィーンに生まれて

1902年に生まれたルーシー・リー(旧姓ゴンペルツ)はウィーン工芸美術学校に入学し、ミヒャエル・ポヴォルニーに陶芸を学びます。彼女が制作を始めた20世紀初頭のウィーンでは純粋美術だけでなく、日用品を通して高い美意識を表現したウィーン工房のアーティストたちが活躍していました。本章では、ウィーン工房の創設者のひとりであるヨーゼフ・ホフマンをはじめ、同時代に活躍した作家、そしてこの時代の空気を吸収して制作されたルーシーの初期作品を紹介します。



1 ルーシー・リー《鉢》1926年頃 個人蔵 撮影:野村知也

2章 ロンドンでの出会い

1938年、ルーシーはナチスの迫害を逃れるためロンドンへと渡り、新たな環境で新しい人々と出会います。例えば、イギリス陶芸界の中心的役割を担っていたバーナード・リーチ、そして、ボタン制作のため工房に参加した、陶芸を学びはじめたばかりの彫刻家志望の青年ハンス・コパーです。本章では、ロンドン時代に制作されたルーシーの作品に加え、渡英後の彼女に少なからず影響を与えた彼らの作品を紹介します。



2 ルーシー・リー《黄釉鉢》1958年頃
井内コレクション(国立工芸館寄託) 撮影:品野 壘



3 ルーシー・リー《コーヒー・セット》1960年頃
国立工芸館蔵 撮影:エス・アンド・ティ フォト



4 ルーシー・リー《壺》1965年頃
京都国立近代美術館蔵



5 ルーシー・リー/ハンス・コパー《カップ》
1960年頃 国立工芸館蔵 撮影:野村知也
©Estate of the artists when it's a collaboration
between Lucie Rie and Hans Coper

上記画像No.1~12を広報用にご提供いたします。
ご希望の方は当館ホームページの画像提供システムよりお申し込みください。
<https://www.momat.go.jp/craft-museum/reproduction>



展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券(5組10枚)をご用意しております。
ご希望の方は画像申請の際に「その他」欄よりお知らせください。

本展の見どころ

10年ぶりの大回顧展

最後に開催されたルーシー・リーの大型回顧展は2015年でした。本展は以来10年ぶりとなる展覧会です。

国内の貴重なルーシー・リー作品が一堂に会するこの機会をお見逃しなく！

ヨーロッパ、日本、双方の視点からルーシー・リー作品を紐解く

新たな美的価値が創出されたウィーン、日本をはじめとした東洋陶磁に範を求めたスタジオ・ポタリーが活動したイギリス。

洋の東西が入り混じる背景のもと制作されたルーシー・リーの作品を生きた時代、出会った人から紐解きます。

日本で人気の高いルーシー・リーの造形世界にふれる

ルーシー・リーの作品は、1989年に草月会館の展覧会で本格的に紹介され、

2010年、2015年の大規模展覧会を経てファンを増やしていきました。以降ファッション誌やライフスタイル誌でも定期的にとりあげられ、

その人気は高まるばかりです。繊細かつ優美な造形世界をお楽しみください。

3章 東洋との出会い

ルーシーが渡英した当時、バーナード・リーチをリーダーとするスタジオ・ポタリーの陶芸家たちは東洋陶磁に範を求めています。また、1952年に開催されたダーティントン国際工芸会議では、濱田庄司らと交友を深め、のちに一緒に個展を開催します。本章では、リーチや濱田らの作品とともに、東洋との関わりを紹介します。



6 ルーシー・リー《白釉鑄文花瓶》1976年頃
国立工芸館蔵 撮影：品野 壘



バーナード・リーチ
《ブリタニーの玉葱売り》1934年
国立工芸館蔵
撮影：アローアートワークス



濱田庄司《塩釉鉄砂抜絵注瓶》
1965-70年頃 国立工芸館蔵
撮影：下瀬信雄

4章 自らのスタイルへ — 陶芸家ルーシー・リー

本章では、1970年以降に制作された鉢と花器を紹介します。小さな高台やすっきりとしたライン、マンガン釉や掻き落としなど、現在私たちが彼女の作風として認識している様式は、この頃に確立されました。釉薬と形態、そして装飾が一体となって洗練された作品をご覧ください。



7 ルーシー・リー《ピンク象嵌小鉢》1975-79年頃
国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス



8 ルーシー・リー《青釉鉢》1978年
国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス



9 ルーシー・リー《白釉ピンク線文鉢》1984年頃
井内コレクション(国立工芸館寄託)
撮影：野村知也



10 ルーシー・リー《ブロンズ釉花器》
1980年頃 井内コレクション(国立工芸館寄託)
撮影：品野 壘



11 ルーシー・リー《スパイラル文花瓶》
1980年頃 国立工芸館蔵
撮影：エス・アンド・ティ フォト



12 本展チラシ

移転開館5周年記念

ルーシー・リー展 —東西をつなぐ優美のうつわ—

Lucie Rie: Elegant Vessels Fusing East and West

— In commemoration of the fifth anniversary of the museum's relocation

2025年

9月9日(火)～11月24日(月・休)

開館時間：午前9時30分～午後5時30分(入館は閉館の30分前まで)

休館日：月曜日(ただし9月15日、10月13日、11月3日、24日は開館)、9月16日、10月14日、11月4日

主催：国立工芸館、北陸中日新聞

特別協力：井内コレクション、京都国立近代美術館

協賛：DNP大日本印刷

観覧料：一般 1,200(1,000)円 大学生 800(700)円 高校生 500(300)円

※()内は20名以上の団体料金および割引料金

※いずれも消費税込

※中学生以下、障害者手帳をご提示の方とその付添者(1名)は無料

※いしかわ文化の日(10/19)および文化の日(11/3)は割引料金

※3展覧会相互割引「北斎・広重 大浮世絵展」(石川県立美術館)、

「ミニチュアドールハウスの世界展」(金沢21世紀美術館)の半券をお持ちの方は割引料金

トークイベント

「日本におけるルーシー・リーの受容」

要事前申込(定員45名)

登壇者：出川哲朗氏(大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長)

聞き手：岩井美恵子(国立工芸館工芸課長、本展監修者)

日時：9月20日(土) 午後1時30分～午後3時

会場：国立工芸館 多目的室

主催：兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会

申込方法はウェブサイトをご確認ください。内容や日時は都合により変更となる場合があります。あらかじめご了承ください。

次回展
予告

移転開館5周年記念 令和6年能登半島地震復興祈念

工芸と天気展 —石川県ゆかりの作家を中心に—

2025年12月9日(火)～2026年3月1日(日)

工芸と天気の関わりをテーマに、石川県ゆかりの作家を中心とした工芸作品をご紹介します。北陸地方の特徴でもある湿潤気候は工芸の技法に恵みをもたらしてきました。また、工芸の作家たちがとらえた移ろいゆく空もよう、春の息吹を感じさせる作品を通して、北陸地方の天気のもとで育まれた表現をお楽しみください。

同時開催

令和6年能登半島地震・令和6年奥能登豪雨復興支援事業

ひと、能登、アート。

アート文化財がつなぐ。Art for the Noto Peninsula

2025年12月9日(火)～2026年3月1日(日)

会場：国立工芸館 展示室1

主催：石川県立美術館、金沢21世紀美術館、
国立工芸館、石川県、金沢市、東京国立博物館



〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-2
お問い合わせ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)
<https://www.momat.go.jp/craft-museum>



アクセス

JR金沢駅兼六園口(東口)より

バス ◎3番乗り場：乗車、「広坂・21世紀美術館(石浦神社前)」下車徒歩7分

バス

◎6番乗り場：乗車(「柳橋」行を除く)、「出羽町」下車徒歩5分

◎8番乗り場：乗車、「広坂・21世紀美術館(いのき迎賓館前)」下車徒歩9分

車

北陸自動車道金沢西ICまたは金沢森本ICから20～30分
近隣に文化施設共用駐車場(無料)があります。